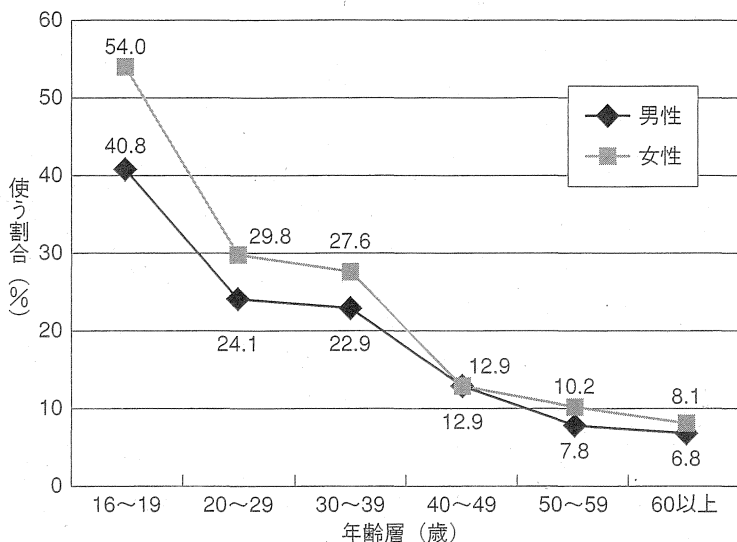


言葉を「ぼかす」気持ち

気になる「とか」

「今日とか、どう？」 映画とか。」
 「昼から友達とか家にくるから無理。」
 「使った」人は一〇代の若者に目立ちます。また、男性より女性に多く、その傾向は二〇代・三〇代にも共通しています。

図 「鈴木さんと話トカしてました」(文化庁平成12年調査から)



「ぼかす」気持ち

文化庁の「国語に関する世論調査」(平成一二年)でも、「鈴木さんと話とかしてました」と自分で言うかと尋ねています。その回答を性別で年代をたどってグラフにすると、確かに「使った」人は一〇代の若者に目立ちます。また、男性より女性に多く、その傾向は二〇代・三〇代にも共通しています。

「とか」のほかにも「ぼかす」言葉はいろいろ指摘されます。「映画なんか見た」「無理っほい」「ダメって感じ」などです。

こうした「ぼかす」言葉を使うことについて、それでは若者たちはどのように感じているのでしょうか。国立国語研究所では平成一〇年に、仙台・東京・京都・熊本の高都市の高校生約一〇〇〇人に意見を聞きました(国立国語研究所報告『言語行動における「配慮」の諸相』二〇〇六刊)陣内正敬分析部分から)。その回答では二つのことが注目されます。

「友達同士」の言葉

一つは、「友達同士なら使ってかまわない」

という意見が全体の六六%、男子で五六%、女子では七六%に支持されていることです。「相手がだれであっても使ってかまわない」という別の意見は全体で七%程度にとどまっています。

「ぼかす」言葉を肯定する理由

もう一つは、「ぼかす」言葉を肯定する意見の多さです。具体的には、例えば「会話がはずんでよい」「気配りが感じられてよい」「やわらかい感じでよい」など、肯定的にとらえている意見が全体の半数近く、四五%あったこと、逆に「はつきり言わずぼかした感じでよくない」「無責任な感じでよくない」などの否定的な意見は二七%に止まったことです。

「ぼかす」言葉を見つめる条件

「とか」に代表される「ぼかす」言葉は、「あいまい、なげやり、甘えた感じ」などと批判されつつ、この先も使われると思います。

そうしたとき、「だれに対しても使うのでなく、友達同士なら」という相手による使い分けの意識と、「気配りが感じられる」「やわらかい感じだ」という「ぼかす」言葉一般に認められる積極面が、暮らしの中でどのように生かされていくのか、注意深く見つめ続けて行くことが欠かせないと私は考えます。

(所長 杉戸清樹)

日本語学習者に親切な日本語辞書

辞書は、外国語を学ぶ際になくてはならない道具です。それは、日本語を外国語として学ぶ場合も同じです。しかし、私たちがふだん用いている国語辞書は、日本語学習者にとって不便なことが少なくありません。ここでは、二つの問題について考えます。

学習者に親切な見出しの立て方を

第一の問題は「見出しの立て方」の問題です。具体的には、独立の見出しとすべき表現が辞書の中に埋もれていることがあります。

たとえば、「おなじみ」は、「なじみ」の項で挙げられているのが普通です。

・なじみ(馴染み) 慣れ親しんでよく知って

いること。また、その人。「あの店とはな

じみが深い」「おなじみの歌」「明鏡国語

辞典』大修館書店

辞書によつては「おなじみ」が見出しとして立てられています。その場合も『なじみ』を丁寧という語』『大辞林第三版』『三省堂』という程度の説明しかありません。

しかし、「なじみ」と「おなじみ」とでは、意味も使われ方もかなり異なります。まず、「おなじみ」は「人々に広く知られている」と

いう意味ですが、「なじみ」は「個人的に慣れ親しんでいる」という意味です。

・テレビや雑誌でおなじみの店(メディアを通じて人々に広く知られている店)

・なじみの店(自分がよく通い、個人的に慣れ親しんでいる店)

また、「なじみ」は「なじみがある(深い、薄い)」という形で使えますが、「おなじみ」は

「(……で)おなじみの～」という形で用いられることが多く、「×おなじみがある(深い、薄い)」とは言えません。

辞書、とりわけ日本語を学ぶ人が使う日本語辞書においては、「なじみ」と「おなじみ」は別の見出しにするのが親切です。

学習者に親切な説明を

第二の問題は「説明のしかた」に関する問題です。具体的には、表現の使われ方に関する情報が少ないという問題があります。

たとえば、「違う」「とんでもない」が応答表現として用いられる場合について、辞書では次のように説明されています。

・違う ……(略) ……半ば感動詞的に、相手の意見などを強く否定するのにも使う。「そ

うではない」の意。「いや、それは違うよ」「違う、違う、こうだよ」

・とんでもない ②相手や他人の考えなどを強く否定するという語。全くそうではない。

めつそうもない。「お礼だなんて、とんでもない」「今さらいやだなんてとんでもない」「とんでもない、私などにはできません」

「とにも」『明鏡国語辞典』

「違う」「とんでもない」は、いずれも相手の発言を強く否定する表現です。しかし、「とんでもない」は謙遜の意味で使えますが、「違います」はそのような意味では使えません。

・「今度ぜひお礼をさせてください。」

「いえ、そんな、とんでもないです(×違います)。」

日本語の母語話者は、「お礼だなんて、とんでもない」という文を見れば、「とんでもない」が謙遜を表しうることがわかります。しかし、日本語学習者にはそのことは用例を見ただけではわかりません。やはり明示的な説明があった方が親切です。

国立国語研究所日本語教育基盤情報センター・用例用法グループでは、今回述べた点も含め、「日本語学習者に親切な辞書とはどのような辞書か」ということについて研究を行っています。

(日本語教育基盤情報センターグループ長

井上 優)

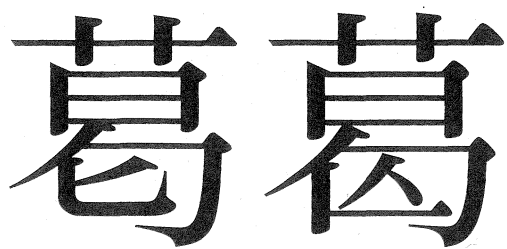
文字生活の心理学

地名に使われる漢字は、その地域住民の多くが長期間にわたって意識的・無意識的に目にしていて考えられます。その影響はどのようなものなのでしょうか。この疑問に迫るため、東京都の葛飾地区と山の手地区で簡単な心理実験をしてみました。

字体心理の仮説

たとえば、「葛」の場合、図に示す二つの字体、いわゆる①新字体と②旧字体がよく使われます。葛飾区の路上で看板や住所表示板を観察したところ、図②を見かけることが多いことに気付きました。葛飾区役所の公式ホームページでも区

図「葛」の新旧字体ペア



①新字体

②旧字体

ムページでも区名の正式な表記は図②だと注記されています。それに対して、図①の字体は二〇〇七年までのパソコンや携帯メールなどの電子機器で表示される場合が多い

ものです。

ここで一つの仮説が浮かんできます。葛飾地区住民（葛飾群）と山の手地区住民（山の手群）を比べてみると、葛飾群は「葛」の旧字体に強い愛着やなじみを持っている可能性があります。だとすれば、「葛」字体の好みの傾向が地域で違うかもしれません。

実験してみると

この仮説を確かめるため、二〇〇五年一月に葛飾区金町と新宿区中野坂上に実験の会場を設け、実験を行いました。調査では、住民の皆さん一〇〇名以上に集まってもらい、漢字の字体に関する好みをたずねました。

葛飾群ですが、親の代から葛飾に住んでいて本人が葛飾生まれ葛飾育ちの住民をおもなターゲットにしました。一方、山の手群は葛飾区に親戚や友人がおらず、その周辺を訪れたこともない人を選びました。全員二〇代から五〇代の女性で、葛飾群と山の手群で年齢条件がなるべく違わないようにしました。「パソコンなどで字を入力している場面をイメージするように」と伝え、より使いたいと感じる方の字体を直観的に選んでもらいました。

字体の好みに地域差あり

実験の結果を表に示します。葛飾群は旧字体を好む人数の割合が新字体の約一・七倍になりました。逆に、山の手群は新字体を好む人数の割合が旧字体の約一・七倍に達しました。葛飾群と山の手群は、字体の好みのパターンがきれいに逆転しているのです。どうやら、葛飾区群は山の手群よりも図②の字体に接触する頻度が高いので、そちらを好む人が多いと解釈できるようです。

字体心理の変化を読む

実は「葛」の字は書籍や新聞などの世界で図②が主流であり、国の漢字政策の一つである「印刷標準字体」でも図②が掲出されています。二〇〇七年一月末に発売されたマイクロソフト社の新しいソフト「ビスタ」でも、印刷標準字体にしたがって通常は図②を表示するように方針の転換がなされました。ということは、山の手地区でも、これからは図②を好む人がだんだんと増えていくだろうと予想できます。日本全国でも同じような変化が生じる可能性があると考えられます。

（研究開発部門言語生活グループ長 横山詔一）

表「葛」の字体における好みの割合

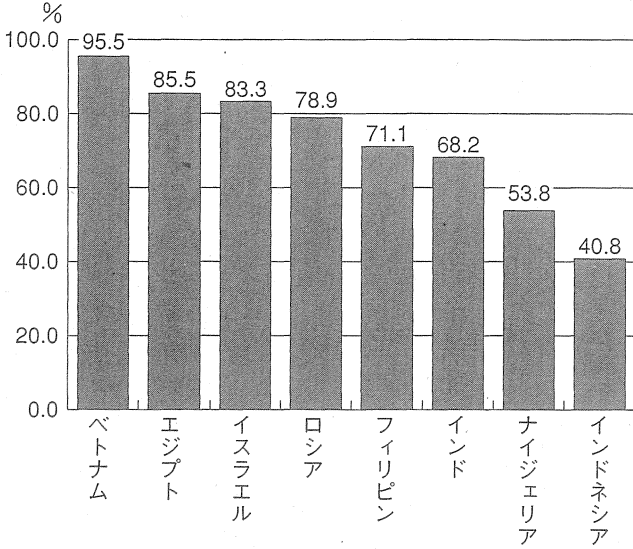
	新字体好き	旧字体好き
葛飾群	36.7%	63.3%
山の手群	63.2%	36.8%

多言語社会の言語政策

言語政策の対象となる問題は数多く存在します。植民地政策としての言語問題、欧州連

合や各国公用語の問題、多民族国家の言語問題、多文化・多言語社会における母語使用や公用語習得といった言語権に関する問題などがその一例です。これらの問題は多言語併存の社会で起こる問題です。日本で生まれ育った人間の多くにとって単一言語使用という状況はごく自然なことですが、世界中を見渡す

図 「義務教育を母語で受けた」割合



と多言語使用が普通の状況とさえ言えます。

各国母語教育の状況

国立国語研究所が中心となって一九九八年に行った『日本語観国際センサス』に、「義務教育を母語で受けたことがあるか」という質問項目がありますので、その一部を紹介してみましよう。一九九二年の国際連合総会で「民族的または種族的、宗教的および言語的マイノリティ少数者に属する者の権利に関する宣言（マイノリティ権利宣言）」が採択されました。その中では「少数者に属する者に母語で教授する機会を与えるよう国家は適当な措置をとるものとする」としています。調査結果の図はその六年後の各国の状況を表していますが、母語による教育を十分に受けられない状況にある国が少なくありません。国連決議を遵守するのであれば各国政府は更なる言語政策推進の努力を必要とすると言つことになるのでしよう。

日本の言語政策の側面

日本では近年、外国人労働者の流入などもあって多言語社会化が急速に進んでいると言われています。彼らの多くは必ずしも日本語が流暢であるという状況にはありません。文字

を読めないが故に、分別ゴミの出し方がわからず近隣住人とのトラブルを引き起こしたといった話を耳にします。そのような人たちの日常生活を支えるため、地方自治体や地域ボランティアによる多言語対応の言語サービスを充実させていく必要があるでしょう。

災害時の情報についても速やかに多言語対応で報道されるべきです。しかし阪神淡路大震災を思い起こすと、翻訳がネックとなり発生から数日間は多言語対応ができませんでした。このような状況を打破するため、私が参加する研究グループでは「やさしい日本語」による情報発信という方法を提案しています。ニュースの内容を、簡単な語彙・文法で速さを抑えて表現、報道することで、日本語能力のそれほど高くない人々にも理解してもらおうという発想です（詳しくは弘前大学人文学部や国語研のホームページをご覧ください）。

戦後六〇年間、日本の言語政策は文字語彙を中心に行われてきました。今後は、例えば多言語社会や高齢化社会などを前提とした視野の広いきめ細かい言語政策の必要性が高まっていくのだろうと思います。その際、言語政策の基本理念としていかなる言語をも、またいかなる立場の人をもできる限り平等に扱うという姿勢が大切になると思います。

（情報資料部門 上席研究員 米田正人）

医療コミュニケーションの適切化

医療現場の喫緊課題

近年、医学・医療の目覚ましい進歩に伴い、この分野の情報は急速に増加しています。医学・医療用語には、非専門家にとって難解な外来語、アルファベット略語、漢語の専門用語が数多く登場しています。また、医療現場では、患者中心の医療を実践し、医療専門職と患者・家族との協力関係や、患者参加型の意志決定を重視する改革が始まっています。

このような状況にあつて、必要な情報が患者・家族に適切に伝わるように、専門用語の使い方を工夫することや、患者・家族と良好な関係を築くためにコミュニケーションを工夫することが、医療現場の喫緊課題となっています。

問題解決・改善策検討のための調査研究

この喫緊課題を遂行するには、まず、どこにどのような問題があるかを明らかにする調査研究が必要です。さらに、医学と言語学の連携によつて、医療コミュニケーション適切化のための具体的な課題を探索し、問題解決・改善策を検討しなければなりません。

難解な専門用語を分かりやすくする工夫
難解な医学・医療用語が増加する中で、分

かりやすい言葉による医師の説明を、国民の多くが期待しています。特に、「喀痰かたん細胞診」「飛沫感染」などの漢語、「セカンドオピニオン」「プライマリケア」などの外来語、「CT」「HIV」などのアルファベット略語の専門用語に、分かりやすい説明を求めています。医師側も、患者や家族の理解と納得が得られるよう、説明の仕方には工夫が必要だと意識しています。

医師をはじめとする医療関係者の協力を得て、患者・家族が理解する必要性の高い専門用語から優先的に、分かりやすく誤解を招かない説明の仕方を検討する必要があります。

国立国語研究所では、今年度から「病院の言葉を分かりやすくする提案」に着手します。ポライトネス・ストラテジーの工夫

患者・家族と医療者がラポール（共感を伴う信頼関係）を築き、協力して対処するためには、ポライトネス・ストラテジー（調和のとれた人間関係を築き維持するために行う、相手に配慮した言語行動）を工夫する必要があります。

ポライトネス・ストラテジーには、ポジティ

ブ・ポライトネス・ストラテジー（気さくに、親しみやすく接することで、相手との心理的距離を縮める働きかけ）と、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー（礼儀正しく接することで相手の立場を侵さないように、心理的距離を保つ働きかけ）の二面があります。

三つの病院で調査したところ、患者は医師に、対等な関係にふさわしい簡素な敬語（敬称も）を使ってほしいと望んでいます。敬語使用は基本的にはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーですが、簡素な敬語を使うのは、より気さくに接することだから、心理的距離が縮まり、ポジティブ・ポライトネス効果も生みます。ラポールといえる良好な患者医師関係、闘病の同士というべき協力関係を築くのに有効です。

逆に、敬称「うさま」「患者さま」や二重尊敬・二重謙讓などの過剰敬語は、慇懃無礼であり、心理的距離を遠くするので、ラポールや協力関係の構築には逆効果であると、患者は意識しています。また、過剰敬語や敬語の誤用は、大事な情報や真意が的確に伝わらない弊害があることも、医師患者双方が認識しています。

今後さらに、調査研究に基づく適切化策を検討し、成果を医療現場に提供していきます。

（研究開発部門 上席研究員 吉岡泰夫）

言葉の記録を残す

はじめに

私は大学で歴史学を専攻していました。今でも、つい、物事を時間の経過というものさしで見る癖が抜けません。言葉を研究するということは、例えば外国人が使う日本語のあり方を考えることであつたり、各地の方言を比較することであつたり、漢字のさまざまな字体を調べることであつたり、色々にありえますが、私は言葉が時と共にどんどん変わっていくダイナミズムに何よりおもしろさを感じます。

資料を保存する意味

さて、私は現在、国語研究所で研究資料の保存と活用に携わっています。研究資料は、さまざまな研究活動を通じて生み出されます。ある研究のために集められ、利用され、研究成果が報告書としてまとめられれば、資料は一応の使命を果たしたことになります。それでは、その資料をあえて五〇年、一〇〇年と保存していく意味はどこにあるのでしょうか。

まず第一に、その研究をたしかに行つた、という証拠として必要です。国語研究所はいい加減に報告書を書いているのではなく、きちんと資料を集め、それに基づいて分析をして

いるのだということの何よりの証拠が、そこで使った資料が存在するということです。そのためには直接の分析素材となつたデータだけではなく、どのように研究を計画し実行したかがわかる事務的な資料や打ち合わせの記録なども保存されなければなりません。

次に、国語研究所が主張する研究結果を別の目で検証するために必要です。集められた資料や情報は研究素材として適切だったか。その集計や分析方法は適切だったか。あるいは、後に先行研究として再評価するためにも必要です。研究資料を残しておくことは、その分野の研究が誠実に蓄積されていくうえで不可欠です。

さらには、この資料を使って、まったく別の研究をすることが可能かもしれません。これまでに、多くの大規模な調査をしてきた国語研究所では、他では得られない規模のまとまったデータがあります。これらを素材として、まったく別の視点から研究ができるかもしれません。資料のもつ可能性は無限です。

アーカイブズとしての研究資料

実はここまで書いてきた資料保存の考え方

は、資料をアーカイブズとして捉える考え方にほかなりません。アーカイブズとは、組織がみずからの活動を進める中で副産物として生み出した文書などを、みずからと社会のために保存する機能です。資料保存には博物館や図書館といった立場で行うものもありますが、研究活動を通じて自然に生み出される資料を保存するには、アーカイブズの視点からみるのが最も適しています。

日本でも公文書をアーカイブズとして残す機関はすいぶん増えましたが、研究資料を組織的に保存・継承している研究機関はほとんどありません。研究資料は、ともすれば個人の研究アイデアと結びついた、多分に個人的なものと考えられがちだからでしょうか。けれども研究資料のもつ可能性はもつと大きなものです。とくに後からさかのぼって再現することができない「言葉」という素材の性質を考えると、後代のためにその時々言葉の記録をきちんと残していく責務は社会的にも重大です。

先行事例がないのでいまだ手探りですが、研究機関の資料保存とはどのようなべきか——その理念から具体的な作業まで——ということについて、これからも考察を続けたいと思います。

(情報資料部門資料整備グループ研究員

森本祥子)

現代日本語の確立過程を調べる

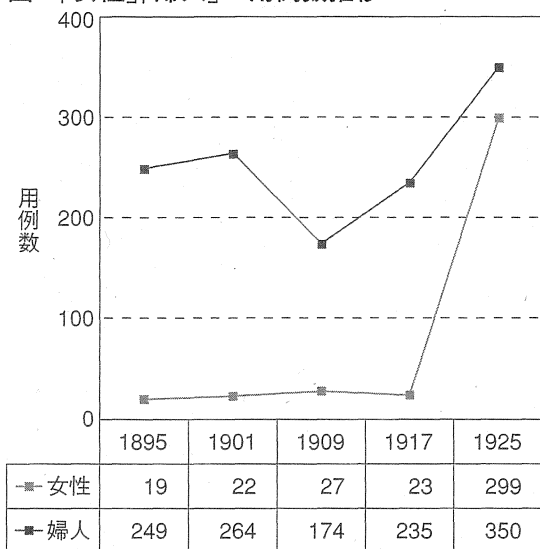
言葉は時代とともに変化します。現代日本語の確立期にあたるこの一〇〇年間ほどの間にも大きく変化してきました。

現代における適切な言葉づかいや今後の国語政策のあり方を考えていくうえでも、現代語が確立してきた過程を調査することは重要です。

「コーパス」を利用する

言葉の変化を調べるためには、古い時代の資料から用例を探し出してどのように使われていたかを見ていく必要があります。そのため

図 「女性」「婦人」の用例数推移



に、以前は、多くの本や雑誌をしらみつぶしに調査するようないへんな労力が必要でした。

しかし最近では、「コーパス」とよばれる、コンピューターを使った大規模な言語資料が用いられるようになってきています。国立国語研究所では、「太陽コーパス」という現代日本語の確立期の資料を作成し、二〇〇五年に刊行しました。これは、明治・大正期に広く読まれた総合雑誌『太陽』の一八九五（明治二八）年から一九二五（大正一四）年までの記事から、約一二五〇万字分を検索できるようなした日本語データベースです。「太陽コーパス」を利用すると、この時代の言葉の変化の様子を比較的簡単に調査することができます。「婦人」と「女性」

ここで、「太陽コーパス」の利用例として、「婦人」と「女性」という言葉について見てみたいと思います。図は、それぞれの用例数を年ごとにまとめたものです。

大正時代の終わりになって「女性」の使用が飛躍的に伸びたことがわかります。「婦人」の用例数も増えていきますから、『太陽』の記事の中で「成年女子」が取り上げられること自体

が増えたことも影響していると考えられます。

それ以前には「女性」はわずかしが使われていませんが、この中には「によしよ」と読むものも含まれています。「によしよ」が「じよせい」として定着するのは、明治の終わりから大正にかけてだといわれています。

この後、「女性」の方が「婦人」よりも多く使われるようになって現代に至ります。現代語では「女性」が圧倒的に多くなりました。「婦人」は、「婦人服」などの複合語や「婦人画報」のような固有名詞に残っていますが、「成年女子」を表す言い方としてはあまり見かけなくなりました。

このように、コーパスを利用することで、たくさんの資料の中から、実際に使われた用例を調査することが簡単に行えるようになってきました。

言語コーパス整備計画

国語研究所では「言語コーパス整備計画KOTONOH A」を推進しています（「太陽コーパス」もその一角に位置づけられています）。現在は大規模な「現代書き言葉均衡コーパス」に取り組んでいるところです。この計画が進めば、現代語の確立の過程についても、用例に基づいた詳細かつ正確な調査が容易に行えるようになるはずですよ。

（研究開発部門言語資源グループ研究員

小木曾智信）

日本語学習者の コミュニケーション能力

「コミュニケーション能力が必要」とは言うけれど

コミュニケーション能力は社会の中で生きていく上で、欠かすことのできない能力の一つです。職場や学校・家庭で起こる問題の要因が、コミュニケーション能力の不足にあるとされることも少なくありません。また、「英語を学ぶことは国際的に通用するコミュニケーション能力を身に付けることである」などと言う場合もあります。このように、私たちは日常的にこの「コミュニケーション能力」という言葉を使用していますが、いったいこの言葉は何を指しているのでしょうか。

コミュニケーション能力とは

まず確認しておきたいのは、コミュニケーションというものは、会話だけではなく、読み書きも含んでいる点です。電子メールで他人とつながっている、という現代人も少なくないでしょう。また、手話や点字、ジェスチャー、絵文字なども、もちろん、コミュニケーションの手段です。もっと広く捉えれば、会話の際の表情や相手との物理的な距離のあけ方、服装も、何らかのメッセージを伝えるものであり、私た

ちは様々な方法を用いて、コミュニケーションを成り立たせています。

他人とのコミュニケーションを成り立たせる、この「コミュニケーション能力」について考える際、よく挙げられるのは、カナルとスウェインが提唱し、後にカナルが修正した、「文法能力」「社会言語能力」「談話構成能力」「ストラテジー能力」という四つの要素です。文法能力とは、例えば「少しゆっくり話してくださいませんか」というような言葉を正確に生み出す能力を、「社会言語能力」は場面に応じて「ちょっとゆっくり話して」「少しゆっくり話していただけではないでしょうか」など、表現を適切に使い分ける能力を指します。「談話構成能力」は、いきなり依頼文を言うのではなく、「あの、すみません」といった言葉をかけてから、本題に入るといのように、話の流れを作る能力を、そして、「ストラテジー能力」とは、「少しゆっくり話してほしい」という願いを伝えるだけの言語的知識が不十分な場合に、「ゆっくり」という単語だけ繰り返したり、身振りで伝えたりして、不足部分を別の方法で補うといった能力を指しています。

「生活」を支えるコミュニケーション能力

現在、日本語教育の世界では、日本に在住する外国人の「生活者」としての側面が注目されています。文化庁による「生活者としての外国人」のための日本語教育事業の募集もその一つであり、日本社会で生活する上で必要な日本語を再検討し、その日本語を身に付けるための教材やコース、評価方法をあらためて開発しようとする動きが活発になってきています。仕事や家庭、医療、学校等の「生活」を支えるコミュニケーション能力とは何か、の捉え直しが行われているのです。

この捉え直しにおいて、従来のコミュニケーション能力に対する考え方では捉えきることのできない、新たな観点が生まれています。

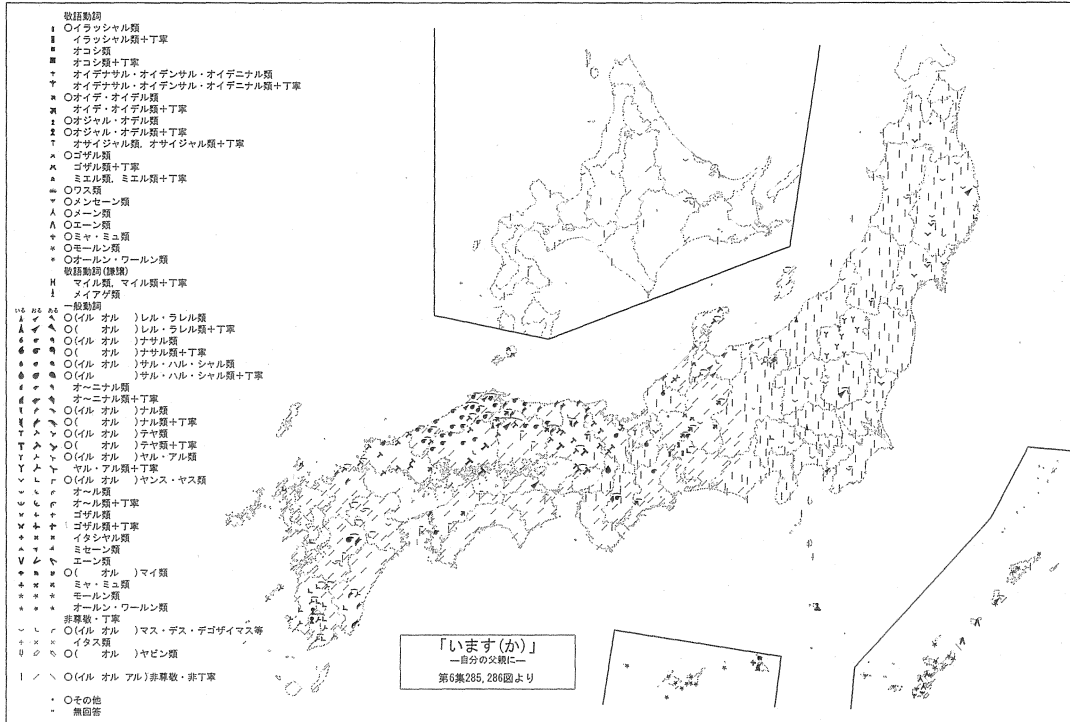
- 日本語教師が判定する能力と、共に生活する人々が感じる能力は異なる可能性がある。
- コミュニケーションが成立するかどうかは、やりとりをする両者に責任があり、学習者だけが努力すればよいというわけではない。
- コミュニケーションの機会を広げ、人間関係を築くための知識・能力も、日本語学習者は身に付ける必要がある。

国立国語研究所日本語教育基盤情報センターでは、現在、これらを含む複数の観点を持って、「生活者」として必要なコミュニケーション能力を具体化するための研究を行っています。
(日本語教育基盤情報センターグループ長 金田智子)

方言分布を探る

国立国語研究所は、全国の方言を調べて、一 それを地図にしてきました。全六巻からなる『方言文法全国地図』もその一つです。

図 『方言文法全国地図』第6集285,286図より



『方言文法全国地図』は、方言の文法に関わる様々なことがらを地図にしています。興味深いのは、一枚一枚の地図が示す分布は、それぞれが個性的であるとともに、地図に現れる個々の言葉の分布は、多くの場合にまとまりを見せるといふことです。

図には、自分の父親に「明日は家にいるか」と尋ねるときの「いる」の言い方の全国分布を簡略化して示しました。中国地方・南九州・東北の一部に注目すると、尊敬語が使われる地域と語形に、まとまりが見られます。

地図を御覧になった方は、あ、同じ日本語と言ってもこんなにいろいろなのだあと、思われることでしょう。ここで大事なことは、地図の裏側には、言葉を使っている人間が存在していて、その

ような人々の使う言葉が地図の形で表わされているということ。当たり前前のことですが、人は、一人で生きていくことはできません。何人もの人と集団を作り、その中で生活をしています。その集団は、多くの場合、それぞれが生活する地域を基盤としています。これが、地域社会です。言葉は、地域社会の中での意思疎通のための大事な道具です。これがばらばらでは、うまくお互いの考えが伝え合えないことになります。分布がまとまって現れるのは、通じ合う共通の道具として、必然的な結果なのです。

それでは、なぜ方言としての違いがあるのでしょうか。この図だけでは分からないことなのですが、別の分析から、図の中で尊敬語が使われている地域の多くは、家族の規模が相対的に小さいことが分かっています。親族内での尊敬語の使用には、そのような家族制度の在り方が関係しているらしいのです。

家族の規模は、世帯を構成する世代数に左右され、地域社会を特色づけています。そのような地域ごとの特性が、親族内での尊敬語の用法を規定し、その異なりが方言の違いとして分布に現れていると考えられます。

言葉の中には、それぞれの地域の暮らしの背景が映し出されていることが分かります。

(研究開発部門言語生活グループ主任研究員

大西拓一郎)

「いどば」の質問に答える

(国語・日本語・言語)

なぜ電話によって回答するか？

国立国語研究所は、原則的に電話によって質問回答を行っています。「ことば」に関する疑問は、科学的な言語事実と、言葉に対する意識の問題との区別が明確でなく、言語自体の問題なのか、人の行動の問題なのか境目のつかない事も多いため、同時双方向の会話によってその分別を付ける必要があるからです。

回答にいたる過程とは？

さて、回答にいたる過程を回答準備の手順によって分けると次のようになります。

①室内で解決して回答する

- ・過去の同じ質問への回答を利用する場合。
- ・過去に質問者が繰り返し返している質問回答記、録を参考にしながら回答する場合。
- ・新規質問を『国語年鑑』・蔵書情報等で検索の上、文献調査をし、回答を用意する場合。
- ・言葉に関する意見を聞いたり、意見内容の実際への見直し等を説明したりする場合。

②所内に回答を求め回答する

- ・研究員を指名し回答を準備してもらおう場合。
- ・プロジェクトや各室に相談したり、代表者に

回答を求めたりして、回答を準備する場合。

話題のひろがりや専門家の特定ができないため、あるいは多方面から回答を求めるため所内メールで質問し、返信をとりまとめ回答を準備する場合。

③所外に応援を要請し回答する

- ・博物館などに直接問い合わせをして、得られた知見を基に回答を用意し回答する。
- ・問い合わせ先を検索しながら質問し、得られた知見を基に回答を用意して回答する。

実際には、回答内容の複雑さや調査範囲の広がり、あるいは調査に要する手間や手順によって、回答にいたる時間は案件ごとにまちまちです。必ずしも流れよく次々に回答するわけにいかないのが現実です。そこで室内には複数の質問が調査段階で進行していて、また先方から電話連絡を待つべく呼びかけているメールによる質問や、質問者から指定があり回答日時を待つもの、連絡がつかず回答保留になっている案件なども含めると、常時十数件が並行して動いている状態にあります。

国立国語研究所らしい回答とは？

①独自の研究によって回答が可能なもの

(↑) 以下は当該調査研究名

- 例…「ニホン」と「ニッポン」の言いわけはあるか。「コンピュータ」と「コンピューター」はどちらも許容されるか。↑話し言葉コーパス。外来語言い換え提案で取り上げなかった語の認知度や使用頻度↑「外来語言い換え提案」。日本語力とは何か。↑「日本語力観」調査
- ②日本語教育基盤情報センターの知見によって回答が可能なもの

例…国内で日系人生徒を受け入れるにあたっての準備情報。海外からの日本語教育法に関する解決策や参考資料のレファレンスと評価

③施策（国語施策、国語科教育、戸籍実務を含む人名表記関連）の当事者ではなく、その問題や状況を観察し判断する、という

研究所の立場によって回答が可能なもの

例…筆順、小学初年上半期平仮名の長音と外来語の長音のひらがな表記、原稿用紙の使用基準等、指導上の直接的基準のない問題への対処や位置づけ。蝶の助数詞「し頭」の由来、「午前・午後」の使い分け等の「科学の常識」を言語生活上どう取捨し生かすべきか。人名漢字の周囲にある異体字の問題、それらを含める言語生活上の支障や実際のやりくり（戸籍・住民基本台帳・住民票・免許証・銀行契約等の署名の使い分けと改名や命名の現実等）の問題。などが典型として挙げられます。

(情報資料部門電話対応グループ長 山田貞雄)

言語活動を支援するソフトウェアの開発

はじめに

現在、携帯電話の仮名漢字変換システムや、日本語を英語に変換する機械翻訳システムなど、多くの「言語活動を支援するソフトウェア」が実用化されています。今回は、筆者が開発中の作文支援システム「TEachOthers」について紹介します。

TEachOthers-VF

TEachOthersは、大学生程度の学習者が、レポートや論文など、書式や構成に一定のきまりのある文章を書くことを支援します。図は、TEachOthersの動作画面です。この例では、「旅行計画」をテーマとした作文を書いているというです。TEachOthersは、Web上で利用できるアプリケーションですので、インターネットに接続できるところならば、どこからでも作文を編集し、作文支援を受けることができます。

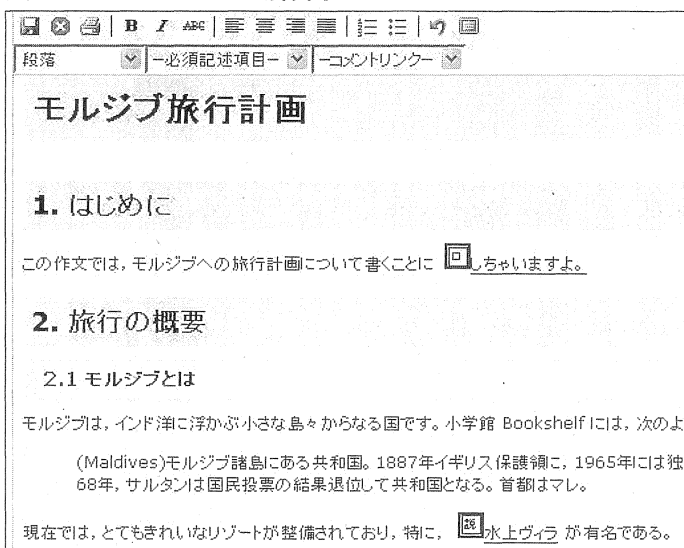
TEachOthersの最も基本的な機能は、教師の設定に基づいて、書式や内容に関するチェックを行うことです。例えば、極端に長い文や段落を分割するように指示したり、作文の

タイトルや著者の名前が明記されていないなどの不備を指摘したりします。

「教えあい」による作文支援

TEachOthersによる作文支援の特徴は、その名前のおり「他人に教えるteach others」「互いにeach other」、学習者同士、「TEachOthersと学習者が互いの知識を「教えあう」ことによって、協動的に作文支援が行われるという

図 TEachOthersの動作例



ことです。例えば、他の学習者と添削しあう機能を持っています。また、学習者が自分の作文の章節タイトルや引用の部分にマークをつける（システムに自分の作文の文章構造を教えること）、TEachOthersはその情報をもとに、章節番号の整合性や、出典情報が明記されているかなどをチェックします。

このように、学習者が他者に知識を教えることにより、学習者が作文技術に関する正確な知識を自発的に学習したり、学習者の知識の整理を促したりするなどの効果が期待できます。みなさんも、家庭教師をしたり、子供に勉強を教えたりする前には、相手にうまく説明できるよう、一生懸命勉強した経験はないでしょうか。

おわりに

TEachOthersが完成すれば、作文は電子的なテキストの形で集積されます。これは、一種のコーパス（言語資料）と呼べるものです。このコーパスを利用すれば、学習者の誤りやすいところを把握するなど、集積された作文を先生が分析して、指導に役立てることが可能になります。また、国語研究所で現在構築中のコーパスの研究成果と組み合わせ、指導方法を改善するといった応用も可能でしょう。

（研究開発部門言語資源グループ研究員

山口昌也）

方言談話資料を利用して

相手への働きかけの気持ちを表す語

話し言葉の中には、書き言葉ではあまり使われない表現が見られることがあります。たとえば、「あのね、あしたね、」や「あのさ、あしたさ、」と言う場合の「ね」や「さ」のように、文中の切れ目に入る「ね」「さ」「よ」「な」「の」などです。

国立国語研究所編『方言文法全国地図』によると、親しい友達に「今日、役場になあ、行つたらなあ」と言う場合、「役場にな」は北海道から岡山県あたりまでの広い範囲で使われ、「役場にの」はおもに中国と、四国・九州の一部で使われています。

各地の会話の記録である方言談話資料（国立国語研究所編『全国方言談話データベース 日本のおふるさとことば集成』）から実際の話し言葉を抜き出してみましよう。

イヤ ワタシカッテナ、アノ、リョコノトキノナ
 一 キロクナ、アルバムイ、ハツテナ、シャシン。
 （いや、私だつてな、あの、旅行の時のなあ、記録な、アルバムに貼つてな、写真を。）
 「奈良県五條市・大正二十二年生まれ・女性」
 昭和五六年収録

「な」のような語は、文節の終わりに自由につき、取り去つても文の成立や意味内容には影響がありません。けれども、文全体の調子に抑揚をつけて、自分の話しぶりを強調したり、相手の関心を引きつけたりなど、相手への働きかけの気持ちを添えています。

印象と評価の背景

地域によつては、「あのな」「あのよ」を女性が使うことに違和感を持ち、「乱暴」「ぞんざい」「男っぽい」と感じたり、逆に、「あのね」を男性が用いることを「女っぽい」という印象でとらえることがあります。また、「あのさ」を「都会風」「東京っぽい」／「きざし」「気取っている」などのように、肯定的／否定的に評価することもあります。さらに、話し相手が目上か目下かで使える語が決まっていたり、くだけた場面でしか使えないなどの制限があったりすると、「失礼だ」「なれなれしい」という行き違いが生まれるおそれもあります。

このようなことから発生する誤解や反感などにするためには、言語地図とは異なる観点からの全国的な概観が必要です。談話資料を用

いることによつて、使用者の属性、使用場面、語の丁寧度などの地域差を知ることができます。
自分でも気がつかないこと

会話では、一人の人の話の中に、さまざま異なる形ものが現れることがあります。

トコロガネー キョ オトシカナー オテーチャ
 ノン テレビ ヤツテサ ソレデ フーズクコーショ
 ー コッチガ ウケモツテサ。ソーシタラ アレ
 ハイユーサンガ シキー フンジメヤーガッタングヨ。
 コマツチャツテサ。
 （ところがねえ、去、一昨年かなあ、「おていちゃん」のテレビをやつてさ、それで、風俗考証をこつちが受け持つてさあ。そうしたら、あれ、俳優さんが敷居を踏んでしまいやがったんだよ。困つてしまつてさ。）
 「東京都台東区・明治四四年生まれ・男性」
 昭和五五年収録

何気なくしゃべつていて話し手本人も意識していない言葉や、使っていると思ひ込んでいる言葉が、実際にはどのように用いられているかを、談話資料の中に見つけることができます。語や語の運用のしかたの地域差を明らかにするために、実際の談話を切り取って観察することが有効です。利用できる談話資料の量と種類を広げて、他の資料や調査法からは見いだすことの難しい事象の解明に近づいていきたいと思つています。

（情報資料部門資料整備グループグループ長
 井上文子）